

震災後の給油行動等に関する研究

元田良孝・宇佐美誠史

1. はじめに

震災直後に起きたガソリン不足で大きな混乱が生じた。この原因は輸送ルート被災などによるガソリンの供給不足だけでなく、パニックでの不要不急な給油の可能性があったので意識調査を行い検証した。

2. 研究方法

岩手県内で公共交通が整備されている盛岡市とあまり整備されていない遠野市を調査対象地とした。平成23年7月にアンケート調査票を盛岡市で2000通、遠野市で800通を新聞折込みで配布し、郵送で回収した。回収率は盛岡市17.9%、遠野市15.5%であった。

3. 研究成果

(1) 震災後初回給油の時期

全体では震災当日から1週間以内に給油した者は約2割で、ガソリン供給に問題があったと考えられる3月末までの者は約6割である。遠野の方が早い時期に給油しているが、遠野は公共交通機関が不便で目的地も遠く自動車を使わざるを得ないためである(図1)。

(2) 給油の目的

震災当日～1週間以内で最も多いのは「通常の燃料の減少のため」が40%であるが、「ガソリン不足の不安を解消するため」等が約同数の35%もある。一方4月以降ではこの割合は21%に減少する(図2)。震災直後は不要不急な給油行動が多かったと考えられる。

(3) 給油と自粛意識の差

盛岡市85%、遠野市88%と両地域とも9割近い者が給油を自粛したと答えている。しかし4月以降給油した者を自粛した者と行動から判断した場合、多くの者は自粛をしておらず意識と行動にギャップがみられる。この差は遠野の方が大きい。

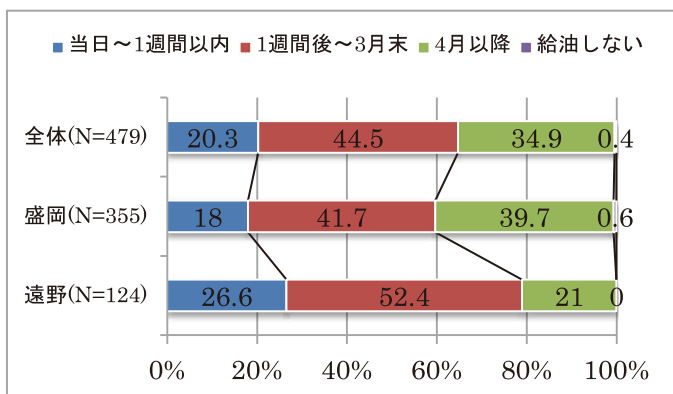


図1 震災後初回給油の時期

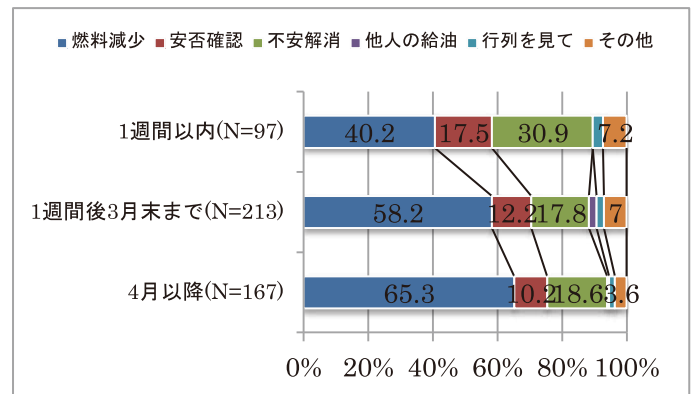


図2 給油の目的

(4) 給油時ガソリン残量

給油時のガソリン残量を時系列で比較した(図3)。震災前ではエンピティマークまで等と残量が少なくなってから給油していた者が多かったが、震災後はなるべく満タンに近い状態で走る者が多くなった。しかし燃費が悪化するので環境面からは好ましくない。

4. おわりに

調査結果から震災直後を中心に不要不急の給油があり、不安解消行動でガソリン不足がより深刻になったと考えられる。この対策としてはガソリン需給の十分な情報提供と消費者の自覚が必要であるとともに、公共交通の整備等により自家用車に依存しない社会の構築が望まれる。

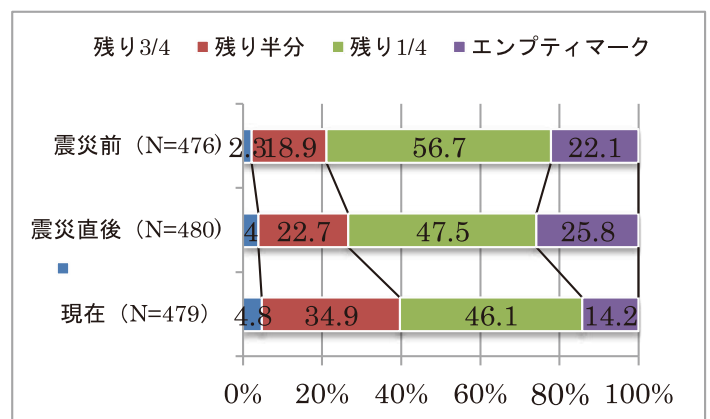


図3 給油時のガソリン残量

陸前高田市応急仮設住宅入居者の交通需要に関する研究

元田良孝・宇佐美誠史

1. はじめに

東日本大震災によって、陸前高田市は甚大な被害を受け市街地のほとんどを津波にさらわれ、多くの死者行方不明者を出した。現在、約2千世帯が陸前高田市内の応急仮設住宅に入居しているが、これまでの生活活動の拠点、住居などを失った市民が、今のような交通移動実態やニーズなどを持っているのか把握することは、復興期間中の交通計画を考える上で重要なデータとなる。

本研究は、陸前高田市の依頼により行うこととなったが、応急仮設住宅へのアンケート調査を実施し、その結果を分析する。

2. 研究方法

陸前高田市や応急仮設住宅に住んでいる方から交通の現状やニーズなどをヒアリングし、その結果を利用して交通の現状やニーズなどを捉えるためのアンケート調査を行う。その結果から、復興期間中の交通計画について考察、提案をする。

3. 市役所、応急仮設住宅でのヒアリング

2011年11月16日に学部2年生の基礎演習Ⅱの授業を利用し、陸前高田市の公共交通担当である企画政策課と2つの地区の仮設住宅の代表者にヒアリングを行った。主に、公共交通の現況や展望、仮設住宅生活における交通の状況、交通に対する要望などである。以下に、結果の一部を紹介する。

4. 応急仮設住宅生活の交通ニーズ調査

陸前高田市民の応急仮設住宅生活下での交通需要を把握し、当面の公共交通計画策定のための基礎資料とするため、市内の応急仮設住宅全世帯に対してアンケート調査を行うこととなった。

主な内容は、以下の通りである。日常生活における外出について、目的ごとに頻度、時間、外出先、交通手段。現在運行している路線バスや乗合タクシーの評価。移動販売、ネット販売の利用状況、仮設住宅へのアクセスなど。

調査票は1世帯につき個人用が3部、世帯主用が1部として、全ての応急仮設住宅へ1月11日に直接配布、郵送回収（1月22日締め切り）とした。配布した世帯数は2,171で、1月20日時点では885世帯から調査票が回収されている。

表1 市役所ヒアリング

交通の現況
<p>仮設住宅へのアクセスが大型の路線バスでは難しい地区がある。ボランティアで病院を結ぶバスやマイヤの買い物バスなどによって、すべての仮設住宅において、全く病院に行けないということはないと思われる。</p> <p>広田半島では、運行ルートに波がかかる部分がある。運休をしたことはないが、安全のために迂回して運行したことがある。</p> <p>国交省の実験の一環で、車椅子にも対応している高齢者向けの車両を、タクシー事業者に無償で提供してもらっており、利用者からは好評である。</p>
住民からの要望やクレーム
<p>バスが来なかったり、早発したりするなど安定した運行や民間の医療機関の近くに新たなバス停の設置を望んでいる。また、声になっていないものもあると思われるので、アンケートなどにより明らかにしていきたい。</p>
今後について
<p>復興期間は短期間ではないため、その期間の交通については、国の調査事業費を使いながら市民のニーズを吸い上げて、整備をしていきたい。</p>

表2 応急仮設住宅代表者ヒアリング

交通の現況
<p>移動販売があるため、買い物に出かけなくてもある程度は間に合っている。衣料品の移動販売はほとんどない。</p> <p>マイカーを持っている人が多いため、バスを利用している人は多くない。</p> <p>盛岡方面のバスに乗るためのバス停へ向かうバスがない。また、仮設住宅同士を結ぶ路線バスがない。</p> <p>仮設住宅の駐車場は、1世帯あたり1台と制限しているところもあれば、何台でも停めてもいいところがある。雪が降ると、除雪のために駐車スペースがかなり割られることになる。</p> <p>仮設住宅にアクセスする道路が狭いため、すれ違いの際に何人か事故を起こしている。</p> <p>お互い送迎し合っている人たちがいる。また、前もって予約しておけば、どこでも連れて行ってくれる団体がある。</p>
今後について
<p>移動販売があるため、買い物に出かけなくてもある程度は間に合っている。バスの時間が活動に合っていない。マイヤにバスを使って買い物に行っても、帰りのバスまでの待ち時間が長すぎる。</p> <p>仮設住宅に大型の路線バスが入って来れない。乗合タクシーであれば入ってこれる。</p>

5. おわりに

今後は、アンケートの分析を進め、当面の公共交通計画について陸前高田市と検討を進めていく。

元田良孝
(もとだよしたか)
総合政策学部教授
専門：交通工学



元田良孝

宇佐美誠史
(うさみせいじ)
総合政策学部助教
専門：交通工学



宇佐美誠史